

## 第5章 総 括

### 第1節 20-3トレンチ検出の井戸SE1と富山城内の井戸について

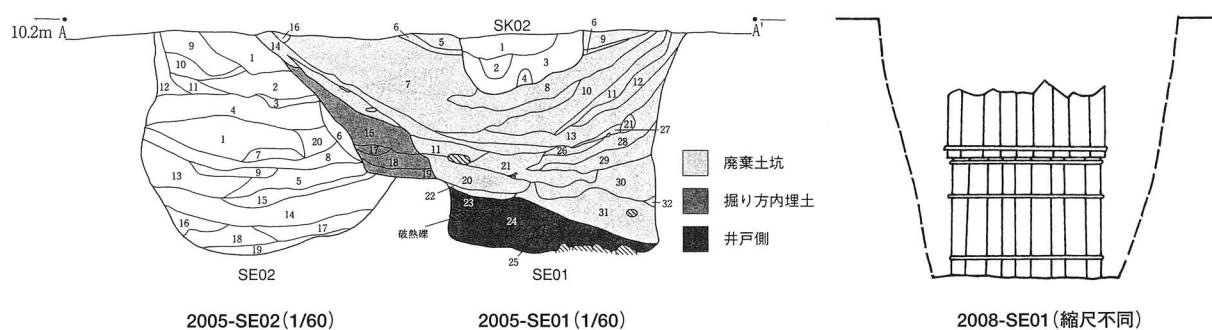
20-3トレンチで井戸とみられる遺構(SE1)を検出した。富山城内で井戸を検出したのは初めてである。本節ではSE1と富山城内における井戸について検討したい。

**井戸の根拠** 第3章の内容と重複するが、最初にSE1を井戸とした根拠を述べておく。当初はかなり大規模な遺構であることが予想されたため戦国期の堀の可能性を考えた。西側で調査した16-2トレンチで東西方向に延びる戦国期の堀が検出されており(富山市教委2006)、これに続く遺構と考えたのである。しかし、調査を進めていく過程で南北に弧状のプランが見えてきた。廃棄土坑のような遺構も考えたが、垂直に近い角度で掘り込むことやかなりの深さがあることから最終的に井戸とするのが妥当と判断したものである。

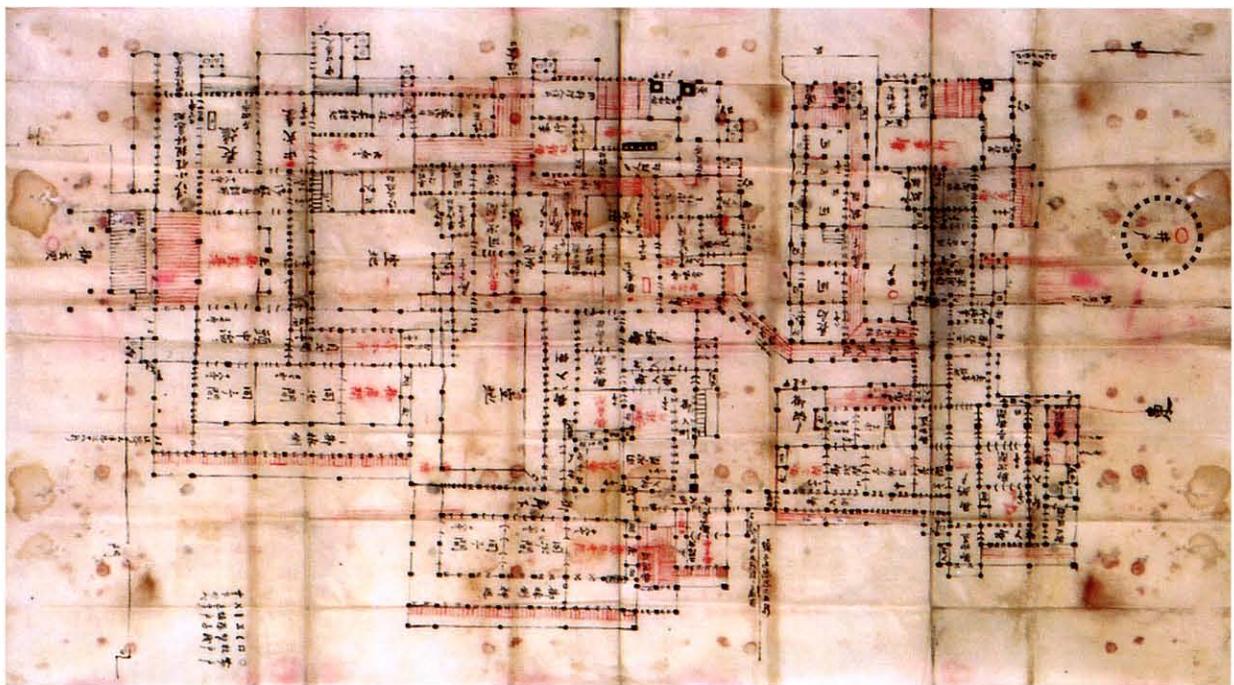
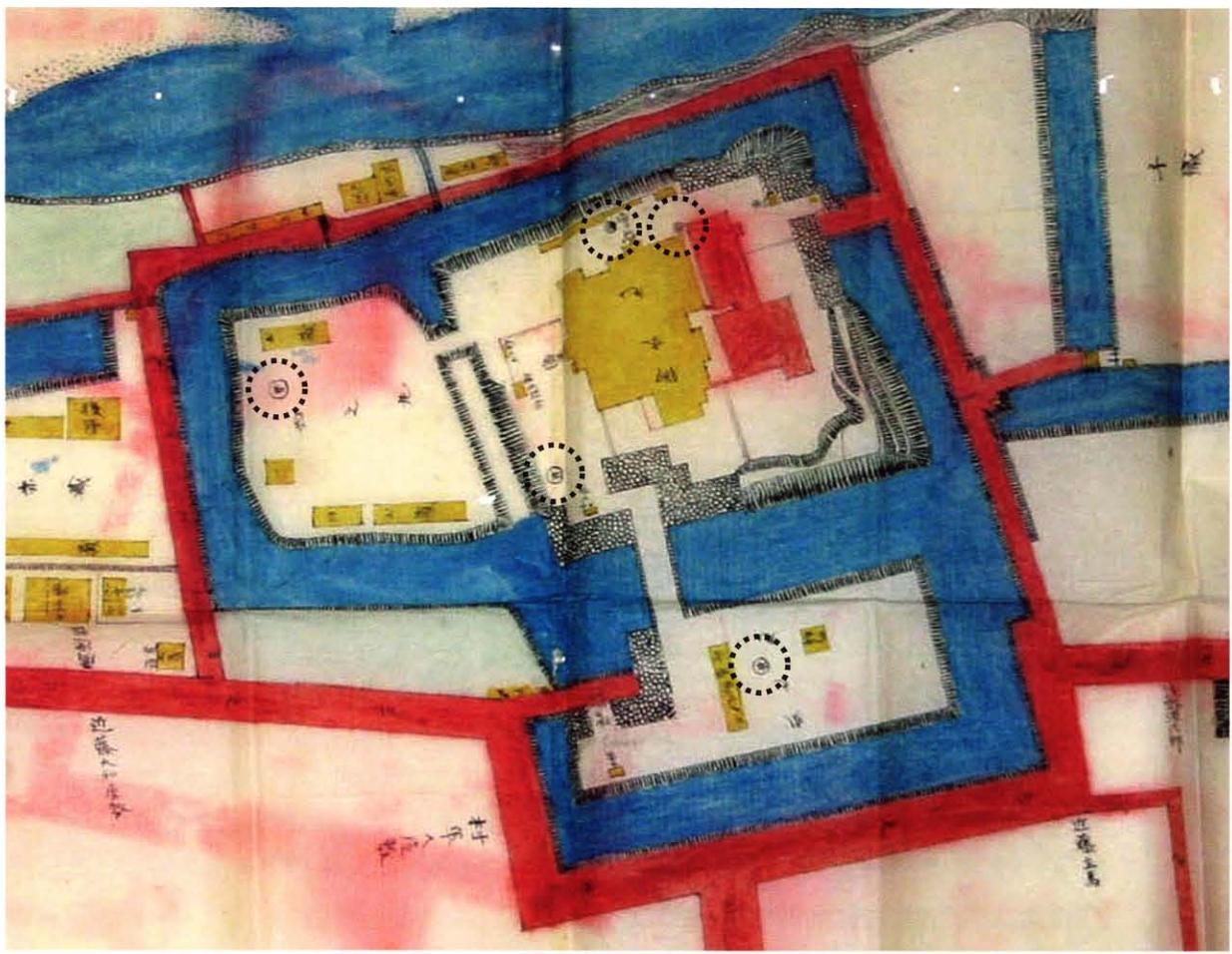
覆土から出土する遺物の時期は、16世紀後半～17世紀初めと考えられる。したがって井戸の掘削・使用年代は16世紀中頃の中世富山城成立期に遡る可能性が高い。

**構造と類例** 北壁断面をみると、段状に掘り込まれている様子が看取できる。調査では標高8.0～8.2mで明確な遺構プランを確認した。これは2段目の掘り込みに相当するレベルである。ごく一部しか検出していないので規模は大雑把な推定となるが、2段目の径はおよそ直径3.6mである。この2段目の掘り込みの規模から、1段目の掘り込み(遺構検出面)の規模を推測すると、直径約5.4mとなる。これだけ大規模な掘り方を掘削していることから、下部に何らかの井戸側が存在した可能性が高い。調査では井戸側の痕跡は確認していないため、井戸側が存在するならさらに下層にあると思われる。後述する富山城下町の調査では、井戸側が抜き取られた例があるため、本遺構も抜き取りの可能性がある。今回掘削したのは、井戸掘り方の上層部分と考えられよう。

富山城内の井戸の検出は今回が初めてであるが、城下町では調査例がある。これらを参考にSE1の構造を検討したい。城下町の調査は、市街地再開発事業に伴い、現在の「大和」やその隣の立体駐車場「グランドパーキング」建設地等で行われている(富山市教委2005、総曲輪通り南地区市街地再開発組合ほか2006、堀内2008)。これらの調査で計9基の近世の井戸が検出された(※以後、これらの井戸を「2005-SE01」のように各報告書の年度—遺構番号で記す)。このうち3基は井戸側が抜き取られた可能性が指摘されている。明確な井戸側が確認されたのは、2005-SE02、2008-SE01である(第27図)。いずれも桶積上げ井戸である。後者は、上部が削平されているので掘り方の様相は不明だが、前者は、2.5m×2.25mの楕円形の掘り方を持ち、深さは2.95mある。なお、2005-SE02とほぼ同時期の2005-SE01は、4.4m×3.4mの楕円形の掘り方を持ち、掘り方は最初斜めに掘り込んだ後、やや水平となり、その後、さらに垂直に近い角度で落ち込む(第27図)。段状に掘削する



第27図 富山城下町検出の井戸(富山市教委2005、堀内2008)



第28図 前田利同城囲の図（部分）（上）と越中富山御城御絵図（下）（丸点線が井戸の位置）  
(富山市郷土博物館蔵)

掘り方は本遺構と同様である。時期は2005-SE02・SE01が17世紀第二四半期、2008-SE01が17世紀第二四半期～第三四半期とされている。16世紀後半～17世紀初め頃の遺物を出土するSE1とはやや開きがあるが、いずれも大規模な掘り方を掘削し、掘削方法も類似するものがあることは留意される。SE1も同様の構造であった可能性がある。

**廃絶の時期** 出土遺物から判断すると、SE1は16世紀後半から17世紀初めの間に埋没した可能性が高い。慶長10（1605）年に前田利長により大規模な改修が行われ、富山城が近世城郭として整備されることから、井戸はこれに伴って廃絶された可能性が考えられる。

**絵図にみられる井戸** 最後にSE1と時期は異なるが、関連する問題として絵図に描かれた城内の井戸について検討する。

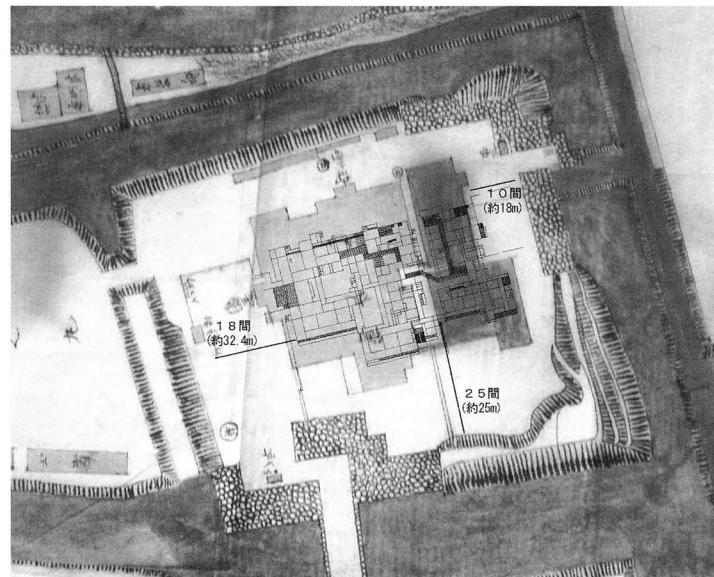
富山城の絵図のうち、幕末期（慶応末年頃）を描いた「前田利同城囲の図」（以下、「城囲図」とする）には、本丸に3ヶ所、西の丸に1ヶ所、二の丸に1ヶ所井戸を示すマークがある（第28図上）。

一方、天保6（1835）年の「越中富山御城御絵図」（以下、「御城図」とする）は、本丸御殿内の間取りが詳しく描かれる（第28図下）。この図では御殿の東側に井戸が1基ある。しかし、この絵図では石垣等の外部施設が描かれていないため井戸が本丸のどの位置に当たるかが不明である。したがって、まずこの御殿自体が本丸のどの位置に当たるかを検討し、その結果から井戸の位置を推測したい。

御城図は、石垣等は描かれないと、石垣や土手からの距離を記した記述がみられる。たとえば東では「此角より石垣際迄十軒」、南では「堀土手際迄廿五軒」、西は「此際より土手際迄十八軒」といった具合である。これを手がかりにすると、本丸の中における御殿の位置がおよそわかる。これによつて城囲図に御城図の御殿の位置を重ね合わせたものが第29図である。これによると、両図の御殿は南北幅が大きく異なる。両図は約30年の時期差があるので、両図の間に増築や改築があったと考えられなくもないが、建物の輪郭は凹凸の具合がよく似ていて、その可能性は低い。細かい修築はともかくとして、天保6年と慶応末年の間で建物に大きな変更はないと考えたい。そうすると、いずれかの図あるいは両方の図に伸縮の間違があると考えられる。城囲図は、本丸内における御殿の位置を石垣等との位置関係を踏まえながら描いたと推測されるため、より実態に近いのではないかとも思うが、断定はできない。

御城図にみられる井戸の位置は、御殿の北東部東面にある凸部（御殿の裏手出入口）の東側である。この位置関係を城囲図にあてはめると、井戸は揚手南石垣の北西隅角付近に位置することになり、今回検出したSE1とほぼ同じ場所になる。こうした作業が成り立つのは、先述の両図の伸縮の問題において、城囲図の方が正しく描かれているという前提によつた場合である。仮に御城図の御殿の位置の方が正しい場合でも、検出したSE1とはそれほど離れた場所にはならない。

上述したようにSE1は16世紀後半～17世紀初めに埋没した井戸なので、19世



第29図 前田利同城囲の図と越中富山御城御絵図の重ね合わせ図（富山市郷土博物館作成）

紀の御城図に描かれた井戸とは別物である。しかし、両時期に井戸が同じような場所に設けられていることは注意される。この付近が伝統的に井戸を設置するのに適した場所であった可能性がある。背景に掘削が容易なことや水が湧きやすいといった要因があったのかもしれない。

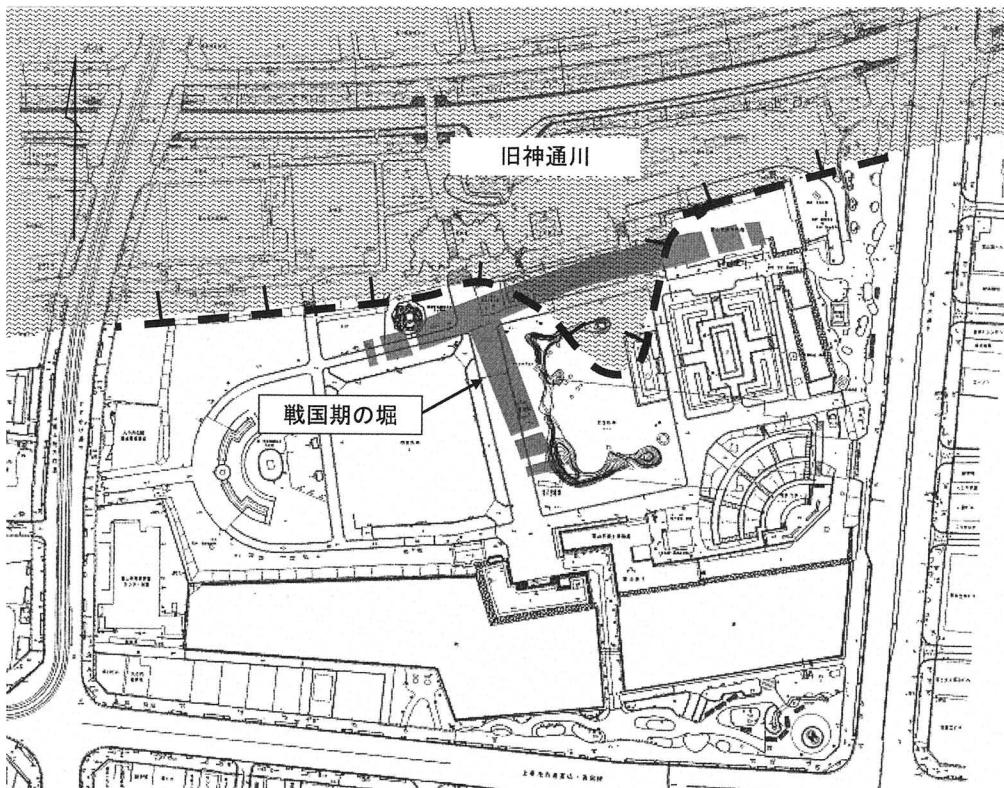
## 第2節 本丸北部の旧地形について

本節では本丸北部における旧地形を検討する。

今回の20-1トレンチ、20-3トレンチの調査で地山とみられる土層を確認した。20-1トレンチでは標高約8.4mで黄褐色砂、20-3トレンチでは標高約7.7mで黄褐色土が検出されている。今年度以外の調査では、20-1トレンチ北西の15-2トレンチでは標高8.74mの灰オリーブ色細砂土が地山とされている（富山市教委2004）。また、本丸の範囲外となるが、さらに西の15-3トレンチでは標高約7.8mで黄灰色砂の地山が出ている（富山市教委2004）。

以上の地山レベルから判断すると、本丸北部の旧地形は、15-2トレンチ付近が最高所であったことがわかる。ここは本丸の北西部に当たる。15-2トレンチを基点に西側に低くなることがすでに指摘されている（富山市教委2004）が、今年度までの調査も含めると東にも低くなることがわかる。さらに、地山の土層に注目すると、15-3、15-2、20-1トレンチが砂質、20-3トレンチが黄褐色土となり、全体的には西側が砂質、東側が通常の土質という関係がみえる。ただし、20-3トレンチは黄褐色土の下に黄褐色・灰白色粗砂（62層）がある。したがって、現在砂質地山である箇所も元々は黄褐色土が被っており、後世に削平された可能性も考えられる。

以上のような地形が推定されるなかで、今回20-2トレンチでは地山を検出していない。東西の20-1トレンチ、20-3トレンチで検出した地山レベルから推測すると、標高8m前後で検出されると考えられたが、標高6.85mまで掘削しても未検出であった。また、20-2トレンチのすぐ西に位置す



第30図 本丸北部周辺の旧地形の推定 (1:3,000)